

イエスのことば 第 68 回 富と死後の世界

しばらくして、この貧しい人（ラザロ）は死に、御使いたちによってアブラハムの懷に連れ
て行かれた。金持ちもまた、死んで葬られた。金持ちが、よみで苦しみながら目を上げる
と、遠くにアブラハムと、その懷にいるラザロが見えた。 (ルカ 16:22~23)

□文脈の確認

1. イエスの公生涯 3 年半。起承転結の四部構成に分け、時間順でイエスのことばを学ぶ
 - (1) 起：紀元 26 年秋の受洗から、翌 27 年春のメシア宣言を経て、宣教開始まで
 - (2) 承：メシアとしての権威を現わすも指導者層の拒否を受ける
 - (3) **転**：紀元 29 年春から約 1 年、弟子訓練の時期
 - (4) 結：紀元 30 年 4 月、エルサレム入城・十字架・復活、復活から 40 日後に昇天
2. **転**の部
 - (1) 紀元 29 年春から秋までの半年、異邦人地域へ 4 回の旅行。目的は休息と弟子訓練
 - (2) 秋 10 月の仮庵の祭りから、冬 12 月の宮清めの祭りまでの約 3 か月
 - (3) **翌年 4 月 1 日までの約 3 か月** ……記事は、全部で 15
3. 15 のうちの 4 番目の記事、**【「罪人たち」に向き合う神の態度】** (ルカ 15 章)

取税人たちや罪人たち (=遊女たち) が、話を聞こうとしてイエスの近くにやって来た。パリサイ人たちや律法学者たちは、「イエスは罪人たちを受け入れて、一緒に食事をしている」と文句を言った。そこでイエスは、パリサイ人たちや律法学者たちに 3 つのたとえ話を語った。その教えのポイントは次のとおり。

神は罪人たちを切り捨てはしない。神は、迷い出た者を見つけるまで捜す。失われた者を注意深く見つける。霊的に死んでいた者が悔い改めて生き返り、神の元に帰るのを待ってくださっている。そして、罪人の一人が悔い改めて神に立ち返るなら、神は天で大いに喜んでくださる。
4. **場面は 4 番目の記事からそのまま続いて、5 番目の記事、【富について】** (ルカ 16 章)

イエスは「不正な管理人のたとえ話」を語り、たとえ話の中に出てくる金持ちの富を「**不正の富**」と言った。律法では同胞から利息をとってはならないと命じられているのに、パリサイ人たちのような金持ちたちは、抜け道を作って自分たちの富を増し加えていたからである。イエスは、「人は神と富との両方に仕えることはできない」と教えた。
5. **今回は、その続き**：イエスの話を聞いていたパリサイ人たちは、イエスをあざ笑っていた。裕福であることは神の祝福を受けているしるしであって、自分たちは正しいと誇っていたからである。そこでイエスは、ある金持ちと貧しい人ラザロが死後どうなったか、実話をもって警告する。**金持ちだからといって、死後の世界の行先が良い所とは限らない。今回のテーマは、【富について】の後半、「富と死後の世界」である。**

□アウトライン 富と死後の世界 (ルカ 16 : 14~31)

1. パリサイ人たちの態度とイエスの警告 (14~18 節)
2. ある金持ちとラザロの実話 (19~31 節)

富と死後の世界

1. パリサイ人たちの態度とイエスの警告 (14~18 節)

パリサイ人たちの態度

16 章 14 節 金銭を好むパリサイ人たちは、これらすべてを聞いて、イエスをあざ笑っていた。

- 金銭を好む・・・パリサイ派の教えでは、裕福な人は神の祝福を受けている人
- イエスをあざ笑っていた・・・イエスが「不正な管理人のたとえ話」を語って、パリサイ人たちのような金持ちたちが所有している富を「不正の富」と言ったり、「神と富との両方に仕えることはできない」と教えたりしたことを、パリサイ人たちは、ばかげたこととあざ笑っていた。

パリサイ人たちへのイエスの警告

15 節 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、人々の前で自分を正しいとするが、神はあなたがたの心をご存じです。人々の間で尊ばれるものは、神の前では忌み嫌われるものなのです。

- 人々の前で自分を正しいとする・・・パリサイ人たちは、旧約聖書の律法や預言者たちのことば、すなわち神のことばに従うのではなく、ユダヤ教パリサイ派が考え議論して積み上げてきた膨大な規則、いわゆる「言い伝え (口伝律法)」に照らして、自分たちは正しいと誇っていた。自分たちで作った基準で採点して、自分たちを正しいとしていたわけである。
- 神はあなたがたの心をご存じです・・・言い伝え (口伝律法) は、日常生活の仕方を具体的に事細かに定め、数値基準も含む膨大な規則である。これは外面的、形式的には落ち度のないように見えるが、律法の本来の意味を見失ってしまった。モーセの律法の本質は、神を愛し、隣人を愛するところにある。その愛が外側の行動に現れての行いであればよいが、愛がなくて、ただ形だけ、規則を覚えてそのとおりにするだけ、となっていた。
- 人々の間で尊ばれるもの・・・口伝律法に照らして良いとされること

モーセの律法はメシアの到来によって終わるが、メシアは律法を壊すのではなく、完全に守る。それに対して、パリサイ人たちは律法をないがしろにしている

16 節 律法と預言者はヨハネまでです。それ以来、神の国の福音が宣べ伝えられ、だれもが力づくで、そこに入ろうとしています。

- 律法と預言者はヨハネまで・・・旧約聖書の時代は、洗礼者ヨハネまで。
 - 律法はヨハネまで・・・モーセの律法はメシアの到来によって終了する。洗礼者ヨハネは、メシアの先駆者として登場し、イエスをメシアであると証言した。
 - 預言者はヨハネまで・・・旧約聖書時代の最後の預言者は、洗礼者ヨハネ
- 力づくで、そこに入ろう・・・「力づくで」と訳されているが、「まわりから暴力的に妨害されながら」の意味。大変な犠牲を払って神の国に入らねばならないということ。なぜなら、イエスをメシア、すなわち神の国の王、として認めようとするなら、パリサイ人たちによって社会生活・経済活動から締め出され、生活ができなくなるからである。

17 節 しかし、律法の一画が落ちるよりも、天地が減びるほうが易しいのです。

- パリサイ人たちがイエスをメシアではないと拒否した理由は、「イエスが律法を破っている。メシアであるはずがない」という点であった。しかし、イエスが破っていたのはパリサイ派が伝統的に作ってきた「言い伝え（口伝律法）」であって、旧約聖書の律法（モーセの律法）ではない。イエスはモーセの律法を完全に守ってきた。イエスがここで、「**律法の一画が落ちるよりも、天地が減びるほうが易しい**」と言ったのは、【自分は律法の一画、すなわちどんなに些細な部分であっても、それを落とす、すなわち違反するようなことは、絶対にしない】ということ。

18 節 だれでも妻を離縁して別の女と結婚する者は、姦淫を犯すことになり、夫から離縁された女と結婚する者も、姦淫を犯すことになります。

- 律法を破っているのは、イエスではなく、むしろパリサイ人たちである。彼らを作り、人々に教えていた口伝律法の中には、離婚に関する教えがある。夫がささいな理由であっても離縁状を書いて渡せば離婚は成立し、そのあと別の女性と結婚することができるかと教えていた。そのため、当時のユダヤ社会では姦淫を隠すような理不尽な離婚が横行し、経済的基盤を失った婦人が遊女になるという社会問題が起きていた。離婚の問題は、後日、イエスが詳しく語る（マタイ 19 : 1～12、マルコ 10 : 1～12）

2. ある金持ちとラザロの実話 (19～31 節)

生前の状況：二人が生きていたときは、どういう生活をしていたか

19～21 節 ある金持ちがいた。紫の衣や柔らかい亜麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。その金持ちの門前には、ラザロという、できものだらけの貧しい人が寝ていた。彼は金持ちの食卓から落ちる物で、腹を満たしたいと思っていた。犬たちもやって来ては、彼のできものをなめていた。

- ある金持ちと貧しい人ラザロ、対照的な二人である。金持ちは、高価な衣服に身を包み、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。他方、ラザロは貧しい、それも乞食をせねばならないほどの、最下層の貧しさである。加えて病気である。体中ができものだらけで、乞食をするにも座ってではなく、地面に寝ていなければならなかった。介抱してくれる人もなく、犬たちが近寄って彼のできものをなめていた。
- 彼は金持ちの食卓から落ちる物で、腹を満たしたいと思っていた・・・思っていたということは、実際には金持ちの食卓からおこぼれをもらったことがなかった、ということである。金持ちは、自宅を出入りするたびに、乞食が門前で横になっているのを見ていたはずなのに、全くあわれみの思いを持たず、無視していた。これは、律法違反である。
 - 申命記 15：11 貧しい人が国のうちから絶えることはないであろう。それゆえ私はあなたに命じる。「あなたの地にいるあなたの同胞で、困窮している人と貧しい人には、必ずあなたの手を開かなければならない。」

死後の行先：二人が死んだら、それぞれ、どこに行ったか

22～23 節 しばらくして、この貧しい人は死に、御使いたちによってアブラハムの懐に連れて行かれた。金持ちもまた、死んで葬られた。金持ちが、よみで苦しみながら目を上げると、遠くにアブラハムと、その懐にいるラザロが見えた。

- よみ、アブラハムの懐・・・「よみ」とは、死んだ人の靈魂が死後に行く先。靈的な世界であるが、位置感覚としては、地の中にあると聖書は教えている。メシアが十字架にかかって人類の罪のために死ぬまでは、信者であっても死んだら、その靈魂はよみに下った。ただし、よみの中でも、信仰によって義人とされた信者が行く先と、信仰を持たずに罪人のままで死んだ不信者とでは行く先とは区分されていて、別々となる。信者の靈魂が行く先は、「アブラハムの懐 (ふところ)」と呼ばれていた。
- 苦しみながら目を上げると・・・この金持ちは、富は持っていたが、信仰はなかった。パリサイ派の教えによれば、金持ちは神の祝福を受けている人だから、よみで苦しみに遭うはずはなかったが、そうではなかった。よみで苦し

ながら、目を上げると、同じよみの中でも「アブラハムの懐」にいるアブラハムとラザロが見えた。

- その懐にいる・・・ラザロがアブラハムに抱かれているという意味ではない。「懐にいる」とは、ラザロがアブラハムと一緒に食卓に着いているという意味。当時の食卓では、座ってではなく、横向きに寝そべる。そのため、ラザロがアブラハムの隣に着席すると、アブラハムの懐近くにいるように見える。

金持ちの訴えとアブラハムの応答

24～26 節 金持ちは叫んで言った。『父アブラハムよ、私をあわれんでラザロをお送りください。ラザロが指先に水を浸して私の舌を冷やすようにしてください。私はこの炎の中で苦しくてたまりません。』

するとアブラハムは言った。『子よ、思い出しなさい。おまえは生きている間、良いものを受け、ラザロは生きている間、悪いものを受けた。しかし今は、彼はここで慰められ、おまえは苦しみもだえている。そればかりか、私たちとおまえたちの間には大きな淵がある。ここからおまえたちのところへ渡ろうとしても渡れず、そこから私たちのところへ越えて来ることもできない。』

- この炎の中で苦しくてたまりません・・・金持ちの霊魂がいる場所は、炎の中で苦しい。まわりには同じ不信仰の死者たちがたくさんいるはずなのに、お互いに助け合うことはできない。遠くに見えるアブラハムとラザロの助けを求められなかった。
- 彼はここで慰められ、おまえは苦しみもだえている・・・金持ちとラザロ、この二人の境遇が生前と死後とでは逆転した。なぜか、それはアブラハムがこのあと語るが、口伝律法ではなく、モーセの律法の教えに聞いていたか、自分で自分を正しいとせず、神の前にへりくだり、神の憐れみと恵みに望みをおいていたか、である。金持ちは富みに希望を置き、ラザロは神のみに希望を置く人生であった。
- 私たちとおまえたちの間には大きな淵がある・・・同じよみの中でも、「アブラハムの懐」と「苦しみ場所」との間には、大きな淵があって、行き来することはできない。

金持ちの要望とアブラハムの応答

27～31 節 金持ちは言った。『父よ。それではお願いですから、ラザロを私の家族に送ってください。私には兄弟が五人いますが、彼らまでこんな苦しい場所に来ることがないように、彼らに警告してください。』

しかし、アブラハムは言った。『彼らにはモーセと預言者がいる。その言うことを聞か
がよい。』

金持ちは言った。『いいえ、父アブラハムよ。もし、死んだ者たちの中から、だれかが彼らのところに行けば、彼らは悔い改めるでしょう。』

アブラハムは彼に言った。『モーセと預言者たちに耳を傾けないのなら、たとえ、だれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』

- 彼らにはモーセと預言者がいる。その言うことを聞くがよい・・・「モーセと預言者」とは、旧約聖書を指す表現。「その言うことを聞くがよい」とは、パリサイ派が作った口伝律法ではなく、旧約聖書が教えていることに耳を傾けよ、ということ。
- たとえ、だれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない・・・現実にそのような出来事が、この後に起きる。「ラザロをよみがえらせる」(ヨハネ 11 章)である。同じ名前であるが、別のラザロ、ベタニア村のマルタとマリアの姉妹の弟ラザロである。

急な病気で亡くなったラザロを、イエスが死後 4 日目によみがえらせるが、この奇跡を見てもなお、権力と富を握っていた指導者たちはイエスをメシアとは認めない。そればかりか、イエスを殺そうと企て (ヨハ 11 : 53)、さらには、生き返ったラザロまで殺そうとする (ヨハ 12 : 10)。

□補足：死後の世界

シェオルはヘブル語、ハデスはギリシア語で、同じ場所を指す。「よみ」と訳される。

その中には、義人が行く場所と、義人でない人たちが行く場所がある。

義人でない人たちが行く場所を、ヘブル語ではアバドンと呼び、「穴」とも表現する。

